

山びこ通信

3月号 2008.3.3

「クラス紹介」

「学びは己のためならず」

文 / 山下太郎

激動する世の中の変化に呼応する形で、よりよい教育を求める議論が年々声高に聞こえてきます。しかし、文科省主導で何か目覚ましい変革が起こることを期待するのでは、いつまでたっても、靴の上から掻くようなもどかしさを感じます。

私は、今すぐ誰にでもできる、教育をよくする道があると思います。その第一歩は、各自が老いも若きも「自分たちでよりよく変えていこう!」とする「学び」の決意をもつことです。かねてから申していますとおり、受験勉強偏重は、合格と共に「学び」がストップする弊害が懸念されます。しかし、それを批判する大人も忙しさを口実として「学び」を停滞させているおそれがないでしょうか。

言うまでもなく、「学び」は教室の中だけにとどまるものではありません。教科の学習だけがその対象になるのでもありません。大学の創始者プラトンは、「善く生きる」ことの意味を終生問い続けました。生きる意味を様々な形で「学び」、それを咀嚼した上で自ら考えることの大切さは、生涯変わらぬものはずです。この努力を停滞させるなら、無意識のうちにも他人の意見をうのみにし、「比較」の中でしか己の価値を見出せない裏返せば自分には価値がないと卑下してしまう悲劇もおこりえます。言い換えますと、「みんなが・・・するから自分も・・・する(しなければならぬ)」と考える癖がつくと、自分の生きる意味を見出せなくなります。

私が上で述べた「学びの決意」とは、「(他人はどう言おうと)自分はこうしたい、こう生きたい」という強い決意をもつことが前提になります。その強い思いがあれば、どのような困難にも耐えて知識を獲得することができるのです。さらには、自分を高みに導く書物や人との対話も、すべてが乾いた砂地に水がしみこむように、ぐんぐんと吸収され、自らの成長の糧となるのです。

このような「学び」の意識をもつ者同士は、年齢に関係なく互いにより影響を与え合い、切磋琢磨できるのだと思います。逆に、師弟においても、親子においても、友人の間においても、誰かが「学び」の気持ちを放棄したら、そこにより関係は結ばれません。人として生まれ、自らを「理想」に近づける努力の一步一步。誰に命令されるわけではなく、強いて言えば、自分で自分に命令することによって進んでいく、そのような自立的な生き方に、老いも若きも区別はありません。

たとえ本人は暗中模索の日々であっても、努力する真摯な姿勢とその実践は他者に勇気と希望を与えます。つまり「学びは己のためならず」ということです。「努力の社会化」と言い換えてもよいと思います。個々の努力は目に見えない系でしっかりつながっているのです。

誰もが人生という山道の登山者であり、それは椅子取りゲームとは本質的に違います。山道を行き交う人が自然に声を掛け合い、山頂を目指すように、私たちは、一步一步目の前の道を登っていきたいと思います。すでに先人のつけてくれた山道、さらには山そのものの存在に感謝しつつ。

(山の学校代表 山下太郎)

ホームページ <http://www.kitashirakawa.jp/yama.html> 電子メール taro@kitashirakawa.jp
電話 781-3215 (山の学校) 781-3200 (幼稚園) / FAX 781-6073 (山の学校・幼稚園共通)

クラス紹介

今月号は、平成19年度冬学期の授業をふりかえり、それぞれのクラスの先生が日頃何を大切に考え、どのような授業を展開しているのかを、「クラスだより」として寄稿していただきました。下記の時間割と照らし合わせの上、ご覧下さい。

また、来学期の時間割(予定)を掲載いたします。現在、生徒と講師との都合を調整しておりますので、予定の段階です。変更につきましてはあしからずご了承ください。

平成 19 年度冬学期・現在の時間割 (12月～3月)

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん 3:50- 5:20 (低学年&高学年)	ことば3年 ことば5・6年	中1~2・日本語の読み書き 中3・数の基本	中1・英語の読み書き 中3・日本語の読み書き
水	ことば1年	かず1~3年	中3・英語の基本 高1・英語の基本	高校・数の世界 ラテン語初級講読 ラテン語中級講読A
木	ことば2年 かず4~6年	ことば4年 かず2~5年	中1・数の基本 中2・英語の基本 高2~3・英語の基本	中2・数の基本 ウェブプログラミング入門
金				ラテン語入門 ラテン語中級講読B



平成 20 年度春学期・時間割の予定 (4月～7月)

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん (低学年&高学年) 3:50~5:20	ことば4年A	中1~3・日本語の読み書き	高1~3・日本語の読み書き
水	ことば1年 ことば2年	かず1年 かず2~3年 かず4年	漢文入門	古文講読 ラテン語入門 ギリシア語入門
木	ことば3年 かず5~6年	ことば5・6年 かず3~6年	中1~3・英語の基本 高1~3・英語の基本	中1~3・数の基本 高1~3・数の基本 ウェブプログラミング入門
金		ことば4年B	古文入門	ラテン語初級講読 ラテン語中級講読

* のクラスは、4月から新しく開講されるクラスです。詳しくは本誌17ページをご覧ください。

「しぜん」 1～6年生 担当 山下育子 / 山下太郎

しぜんだより 冬学期

冬の季節、木々は葉を落とし、幹、枝、冬芽などを守り、春に向けてのエネルギーを蓄えるために冬越しの態勢に入ります。また、草花類は種を残し、土中に根、地下茎を張り、また、ロゼット葉を精一杯に広げて陽を浴びながら冬を越さねばなりません。このお山のすぐ近くまで姿をあらわす、シカやノウサギなどの動物は、樹皮や冬芽、小枝などを食べて冬を越し、リスやネズミはドングリなどの木の実を土の中に運び、冬の間掘り起こしては食べています。クマのように皮下脂肪として体内に備えを持ち冬眠というしくみで冬越しをするものもあれば、昆虫は樹木のように、体の中に蓄えた養分によって動かずに冬眠態勢に入っています。

このように考えると、私たちが自然の生命力を最も強く感じることでできる季節と言え、何と云ってもやはり夏です。一方、冬は、生命力に乏しく自然の営みが休止しているようですが、冬芽、樹皮、森の木々を見ていると、冬こそ自然の基本的な姿を観察できる季節であるとも言えるでしょう。

今年の冬は、雪がたくさん降りましたが、雪は、冬の個性が一番感じられる冬の自然からの贈り物です。この先、しぜんクラスの日には大雪が降ったなら、是非、真っ白の森の中を分け入っていろいろと観察してみたいと思っています。動物の足跡やノネズミのトンネルなど、面白いものを発見できそうでワクワクしてきます。

12月のあるクラス テーマ“ 焚き火・焼きいも ついでに 冬いちご狩り！”

12月4日(火)は、山の学校玄関前で落ち葉を集めながら、クラスの子どもたちが一人、また一人と石段を元気に登ってくるのを迎えました。かばんを教室に置いたらこの日は外で集まりましたが、着いた順に、熊手、ほうき等を使って玄関周辺の手入れをはじめてくれました。そして、全員が揃ったところで皆が軍手をはめ、人が5人ほどは入れそうな薪入れの袋を広げて持ち、真っ赤に火の熾った鉢を注意深く園庭まで運び上げていきます。役割は誰が決める訳でもなく、自然に誰かが受け持ってくれるのが頼もしいところです。



石段をきれいにしよう



熊手はなかなか面白い



手で集めてしまおう



こつこつ真面目に集めよう



特大サイズの袋を抱えて



火鉢をそっと運びます



カシの木の枝を押さえて



火にくべるために折る



焚き火の準備ができたなら、一面冬いちごの斜面に行き“いちご狩り”。蔓まで引き抜いたよ。めっちゃ、旨いよ！





再び戻り、火種の確認



火種の木炭を火ばさみでつまんで、火床の中に入れます



うわっ、よく燃える



さあ、安納芋を入れよう



どんどん、入れていいよ



空気を入れて燃えやすく



もう一ついれるわ



これは甘い、栗より甘いよ！



ジャングルジムで食べよう



あ～美味しい、幸せ！



最後は火の始末も大切だ

12月の強い風の吹く日で、焚き火が終わった頃は辺りはもう真っ暗になり、衣服には焚き火の煙の匂いがすっかりしみこんでいるようでした。1時間半の活動は毎が大急ぎですが、この日は冬の冷たさを肌で感じつつ、焚き火で暖を囲み自然の恵みをいただきながら、ゆったりとした時間が流れているようにも感じました。一つはお母さんに、そして幼稚園の先生にもホカホカのおいもを届けましたね。温かいものはみんなの心まで温かくしてくれました。

1月のあるクラス テーマ“目隠しで ひみつの森を歩いてみたら！”

この日は、まず「しぜん日記」の発表をしてもらいました。発表を楽しみに準備してきたことが伝わってきます。どんなことを発表するのかな？と、みんなは静かに発表者を見守る姿勢で耳を澄ませて聞いていました。発表が終わると、今日の活動について、ホワイトボードでお話をしました。



大文字山の水晶について



知ってる、水晶谷のことや



長い紐は2グループに1本ずつ



では、園庭へ出発！



バンダナを畳んで目隠しに



出来ない人は結んであげます



前から後ろ？後ろから前？



うわっ、なにも見えない

目を隠すと、何が聞こえてくるかな？ 何かの匂いがしてくるかな？ 私たちは、五感の中でもまず視覚が一番のたよりにして生きています。その視覚を覆うと、普段それほど頼りにしていない聴覚、嗅覚、触覚がよみがえります。目を閉じてゆっくり深呼吸を数回してみると静かな静寂が聞こえますし、目を開いていた時の心のもやもやなどがずっと晴れ渡るように思えてくるから不思議です。

それでは2つのグループに分かれます。そして、園庭に二列に並びます。リーダーを先頭に目隠しをしたら、そのまま約5分歩いたところの「ひみつの森の基地」まで、グループの仲間をつなぐ長い紐だけをたよりにゆっくり一歩ずつ歩いてみることにしましょう。



さあ、スタートです！



リーダーにつづきます



落ち葉の道を踏みしめて



まっすぐゆっくりゆっくり

各グループの先頭は、太郎先生と私が「こっちだよー」と子どもたちを導くための声だけをかけますが、あとは、森の落ち葉が積み重なり、いつもの山道を進む時と同じ落ち葉を踏みしめる音、足の裏の感覚、手を伸ばすと木や枝に触れる触覚、あとは自然と鋭くなる聴覚を頼りに進みます。まったく見えないようにバンダナでしっかりと目隠しをしたにもかかわらず、さすがに運動神経や五感が生き生きしている子どもたちのこと、難なく、ひみつの森の基地まで到着してしまいました。

しかし、すぐに目隠しを取らずに、『まだまだ、行けるよ！このままもっと進みたい！』という声みんなからあがりました。それならばと、目隠し歩きのまま5分ほど先にある「ひみつの森の広場(至：瓜生山頂北白川城跡方面と、至：地竜大明神に下りる分岐点)」まで一気に進むことになりました。途中、穴ぼこ道や傾斜のある上り道が続きますが、多少つまづいたり、山道から外れた木立の茂みに脱線しそうになる瞬間はあっても、上手く軌道修正をしながら最終的には全員が遅く目的地まで辿り着くことができました。

こうした子どもたちの、目隠しで黙々と歩みつづけた勇気と忍耐には、驚くとともに大変感心させられました。そして、目隠しを外した子どもたちは、目の前に広がった森の景色の中を思いっきり走りまわり、かくれんぼをしたり、木の蔓にぶら下がりとても楽しそうでした。



やった！目隠しで到着



木から下がった蔓で遊ぶ



目隠しバンダナは、ハッキリ



今日のルートを迎えよう

次に、この広場から来た道を戻る約10分間の帰り道は、「一人だけで走って戻りたい！」という要望が出ましたので、個人(ソロ)で、またはペアを組んで、少しずつ時間差をとりながら園庭まで一目散に走って帰りました。夕陽に照らされて思いっきり園庭を走りまわった後は、そのまま滑るように教室まで戻ります。

教室に戻ると、みんなで目隠しをしたまま歩いたひみつの森のルートを、出発前に記したホワイトボードの図解で再度ふり返りました。子どもたち自身も相当の距離を目隠しで進んだことを理解しながら、思わず、道中での思い当たる出来事を自らホワイトボードに書き込む姿も見られました。

そして、今回の道のりの“ひみつの森の基地”と“ひみつの森の広場”の中ほどに、まだ足を踏み入れていない空き地スペースがあったのですが、そこへ、みんなのもう一つの基地を作りたいという意見が出ました。ならば、その空き地スペースで、みんなは何をしてみたいのかな？とたずねると、椅子を置いたり、木登りのできるツリーハウスのような場所を作りたい！ということでした。そこは、確かにひみつの森の基地よりも明るくて、ほっとくつろげるようなよい場所でした。もし、高い木の上にツリーハウスが出来上がったら、どんなに素敵でしょう。そこから見える遙か遠くには、いったい何が見えるのでしょうか。

クラス終了時間が近づくのを感じながら、子どもたちの夢のプランは、キラキラした瞳の輝きとともにどこまでも豊かに広がっていくようでした。

(文責 山下育子)

小学生・ことばの部

『ことば』1年生 担当 山下太郎

この一年を通し、皆本当にたくましく成長されました。一年を通し使った教材は「俳句」でした。四月当初はひらがなを一字一字なぞるようにかいて写していました。今は、漢字混じりでかけるばかりか、吸い取り紙にくんぐん水がしみ込むように、一度の時間に5つも6つも暗唱し、皆の前で発表できるようになりました。本当に大きな成長を感じ、心より嬉しく思います。今の素直な気持ちを持って、四月からも力いっぱいがんばって下さい。

(文責 山下太郎)

『ことば』2年生 担当 山下太郎

この学年も昨年につづき、一年を通し「俳句」を教材に使いました。俳句は日本の古典です。筆写してよし、音読してよし、暗唱してよし、のすぐれた教材だと思います。季節によって定番の俳句というのがあります。昨年度と同じ俳句を学ぶときも、誰もが新鮮な気持ちで取り組んでくれたのが嬉しく、また、古典のみずみずしい力は、感受性豊かな子どもたちにこそよく感得されるものだと感じました(つまり「またこれー？」というのは断じてなかったということで、私もまだまだ子どもの力、古典の力というものの理解が不足しておりました)。どの生徒も一年を通し、元気に一杯学んでくれたことに対し、私も大きな思い出を頂いた気持ちで一杯です。

(文責 山下太郎)

『ことば』3年生 担当 福西亮馬

冬の空 時雨がふるよ さぶいなあ

この俳句は、生徒が自分で書いてくれたものです。「時雨」という漢字も、ふつうならひらがなで書くところを、こだわりがあってそうしてくれていました。そこには、「時の雨」と書いて「しぐれ」と読むんだ。それは冬のことだ。今は冬だ、だから寒い雨なんだ、と感じ取ってくれた様子が伺えます。また、小学生が雨の路を黙々と歩いている通学風景と、低く垂れ込めている冬の空とが思い浮かびます。それを俳句という形式に流し込むことができ、「冬の空 時雨がふるよ さぶいなあ」となった、そのときの喜びが目に見えるようです。そう言えばこの作者生徒は、「一粒の音にはじまる時雨かな 柏翠^{はくすい}」がお気に入りであったことも思い出します。

そのほかにも、生徒たちの作った俳句をいくつかご紹介します。

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ・白い雲 一度でいいから 食べてみたい | ・運動会 みんながこけて 歩き出す |
| ・ピアノはね ふつうにひけば いいんだよ | ・えんぴつは けしごむ君と ライバルだ |
| ・しぜんはね 大切にしよう みんながね | ・夏になり 眼下ひろがる 海きれい |
| ・わたりどり 冬にかけての おひっこし | ・冬いちの なべをみんなで かこんでる |
| ・大みそか じょ夜のかね聞き 新年を | ・初日の出 朝しか出ぬが 美しい |
| ・お正月 たべものいっぱい うれしいな | ・夕日はね すぐしむけど きれいだよ |
| ・冬になり どの木もかれて 葉がおちる | ・ふきのとう 冬にたえずと 春の風 |
| ・春の海 うらりうらりと 流れてる | ・春になる やさしい風が きこえてる |

四段目以降の俳句からは、だんだんと冬の厳しさから解放されて、春を待ち望んでいるというイメージの変化が伺えます。年が若いからこそ、新芽のように季節を等身大に感じ取れるのかもしれない。

また一郎先生がよく読まれた紙芝居の『杜子春』を思い出しながら、俳句の後には紙芝居を読んでいます。

ところで『青の洞門』という紙芝居があります。菊池寛の『恩讐の彼方に』でも有名になった実話で、鑿で何十年もかかって洞窟をくりぬいたという、一人の僧侶の生き様が描かれています。また一方では、その僧侶に実の父を殺されたという、若い侍が登場します。その侍が、ついに何年もかかって探し出すことのできた仇と、いつの間にか並んで洞窟を掘り始め、最後には青い月光の下で手に手を取り合って「あきましたな。ようございましたな。」と言って赦すという二重の筋立になっています。

この『青の洞門』は、それまでのことばのクラスでも何度か読んだことがあり、その時は僧侶の不屈の精神ばかりを見ていました。今回は感慨深く、ふと「そうか」と感じたことには、復讐に猛る侍の出口のない心にも、光明がさして来て、「あきましたな。ようございましたな。」と言えたのではないかということでした。このように紙芝居もなかなか味わい深いものです。

またこの頃は、物語の時間として『南総里見八犬伝』を読みかけています。もちろん子ども向けに平易に書かれた縮訳版です。時折、自分が小学生の頃に読んでいたものを懐かしく思うことがあり、近所の図書館で手に取ることがあるのですが、その八犬伝は、昔自分が読んでいた版とは少し違うものの、やはり今読んでも面白く感じられ、授業でもいつかと思っていたのでした。

原作は、滝沢馬琴が晩年に二十八年かけて書いた、全百六冊という大作です。目が見えなくなっても、義理の娘に代筆をさせて、執念で最後まで書き上げたと言います。それは『青の洞門』の僧侶にも通ずるところがあるように思います。そうした不屈の精神にも触れて、いつか「大人になったら原文を読んでみたい！」と思ってもらえたら幸いです。

ところで授業で使っている訳本には、次のような訳者からのメッセージがっていました。「勇敢な犬士たちのように、お友達にやさしく、敵にも思いやりをもち、勇気のあるおとなになってください」と。生徒たちからは「えー、なんで敵にも??」という声が上がりましたが、最初敵同士だった者たちが仲間になっていくお話が中には登場します。また八犬伝に限らず、物語だからこそ出会える痛快な話の筋立や、「はっとする」ような言葉の断片が、いつか数珠玉のようにつながって、生徒たちの心の中に宿ってもらえることを願っています。

(文責 福西亮馬)

早いものでもう小学4年生の冬学期も残すところあとわずかとなってまいりました。小学3年生の春からこのクラスを担当しているので、もうすぐ丸二年になります。授業時間前には大騒ぎしながら遊んだり、まだまだ幼さは抜けませんが、大人っぽさが垣間見えることもあります。

例えば、新年第一回の授業時に最後の余った時間で俳句カルタをしたときのことで、やはり得意・不得意があるもので、何枚も札を取れる人もいればほとんど取れない人もいます。そうした状況でほぼ同時に手をついた場合には、取った札の少ない人に譲るというルールが自然とできあがっていて感心させられたものです。また、漢字の練習をしているときには、誰かがわからないとつぶやくと、別の誰かがそっと教えるという姿もよく見られます。そうすることで、双方にとってより記憶に残ることでしょう。さらに、書いて示すよりも手早く口で説明する傾向にあり、そのやり取りの中で部首名なども覚えることができます。もちろんテスト本番では教え合うことは許されませんが、ここではこうした理由のために黙って見えています。

前号の『やまびこ通信』で自分の抱えている疑問について調べてまとめてもらうという課題に取り組んでいると書きました。苦労して何とかまとめ終わった後で、生徒たちから「先生がしないのはずるい!」と言われました。それももっともだと感じ、それぞれさらに一つずつ疑問を挙げてもらい、それについて調べてきて報告しました。その疑問は「ポケモンは全部で何種類あるか」や「ドラゴンは実在するのか」といった、大人の常識からするとくだらないと片付けてしまいがちなものでした。しかし実際に調べてみるとこれが意外とおもしろかったのです。ポケモンに関しては、「仮面ライダースナック」、「ビックリマンチョコ」に引き続いて、およそ十数年という子供世代の交替ごとに収集型おもちゃのブームがあったことがわかり、懐かしく感じました。そろそろポケモンから十数年が経つころなので、ひょっとすると新しいブームが到来するかもしれません。ドラゴンについては、西洋のものは「竜」、インドや中国の蛇のようなものは「龍」と訳し分けられることがあるとは、それまでに全く知らず、新鮮でした。

読み物については、前の秋学期は自然科学的な題材でしたので、今学期はまた文学に戻りました。芥川龍之介、宮沢賢治といった、近代以降の有名な作家による短編を1回読みきりで選んできております。作品を読む前に著者の略歴などを簡単にではありますが説明してまいります。芥川龍之介のときは、彼が若くして自殺したということが生徒たちの印象に強く残ったようで、作品中からも死の影を読み取っていました。テキストは青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)から取ってくる人が多いです。著作権切れのため無料で使える割には、最近では内容が充実してきています。

冒頭でも少し触れましたように、漢字の練習も引き続き行っております。漢字検定は、8級は3年生までの漢字、7級は4年生までの漢字というように難易度が分かれていますので使い勝手がよいです。早く次の級に進みたいという生徒もいれば、もうほとんどできているのに同じ級に留まっていたいという生徒もいろいろですが、自分に適した級を見つけて練習に励み、春までには4年生の漢字(7級)まではほぼできるようになりたいものです。

この二年間は、国語が好きになること、少なくとも嫌いにならないことを最優先にして授業を進めてきました。昔は漢字が嫌いだと言っていた生徒がいつの間にか好きになっていたことがわかったりしたので、こちらの意図がある程度は伝わったことでしょう。これから5年生になると要求される水準が高くなると思いますが、楽しみながら基本的な読み書きを続けてもらいたいです。そうすればきっといつの日か立派な実を結ぶはずです。

(文責 浅野直樹)

「海流」

「太古の昔から、北太平洋をめぐる海流は、まるでその出口を求めるかのようにぐるぐると回り続けている。日本の東沖を北上しながら、その一部はベーリング海へ抜けるが、本流は黒潮となって南アラスカ沿いをたどり、まるで弧を描くようにプリティッシュ・コロンビアへと南下した後、東のハワイ方向へ向う流れは次第にその方向性を失ってゆくが、さらに赤道へと南下してゆく本流はそのままグアム、台湾へと進み、やがて北上しながら再び日本の東沖を通り過ぎてゆくのである。」

(星野道夫「海流」『旅をする木』文春文庫、1999年、92頁)

筆者星野道夫氏によると、この海流に運ばれて、江戸時代の日本から一艘の船がアラスカに漂着したという記録があるそうです。筆者は、アラスカの海辺に流れ着いたガラスの浮きの多くが日本からのものであることを知り、何気ない海辺の漂流物とかつて難破船のたどった運命を重ね合わせ、「壮大な物語」と表現しています。こうした潮の流れが運ぶものは、それが漂着した先の人びとを驚かせ、珍しがらせ、時に感傷を抱かせたようで、愛知県伊良湖崎にココ椰子の実が流れ寄るのを見て、民俗学者の柳田國男が『海上の道』を著し、その話を聞いた島崎藤村が「椰子の実」を歌ったことは有名な話です。

冬学期は、小学校高学年クラスは上掲の星野道夫「海流」と、それに関連して柳田國男『海上の道』の島崎藤村とのエピソードの箇所を読み、また漢字検定5級の総復習を行ないました。中学生クラスは、『山月記』で有名な中島敦の「文字禍」と星野道夫『長い旅の途上』を読み、また漢字検定準2級のテキストを一冊終え、あるいは各級の問題を取り混ぜて適宜復習を行ないました。特に小学生クラスの進展は著しく、授業前には集中して漢字の復習に取り組んでおり、集中し練習した分だけ成果にも反映されています。生徒自身もそうした進展に自覚的であるようで、たいへん良い傾向だと思います。

さて、先述のように、海流が船や椰子の実やガラスの浮きやいろいろなものを運ぶというのは、なるほど確かにその通りです。しかし、海流が運んだものが海岸に流れ着くまでには、やはりさまざまな予期せぬ偶然の積み重ねがあったはずで、あるものがある海岸に流れ着いたのも、数ある偶然のひとつの帰結なのではないか。偶然の持つ力は、あらゆることを因果関係のなかで考えようとするときには大して意味を持たないように感じられますが、しかし、何が起こるかかわからない、どのようなことが待ち受けているかわからない、そういう偶然なしでは何の深みも広がりもない平板な物語になってしまうでしょう。

舞台を山の学校に移してみれば、私が準備した授業は生徒にとって偶然出会う知識であるはずですし、私にとって生徒が発することばのひとつひとつはしばしば予期せぬものです。山の学校は、今号巻頭文にも明らかなように、一般の進学塾とは異なる理念のもとで設立された教育の場であり、授業準備にあたって学習指導要領などに準拠することは基本的にはありません。従って今年度学んできたことの総まとめの学期である冬学期においても、この一年を通じていくつも積み重なった偶然がもたらす結果は、指導要領が示す到達目標や単なるテストの点数の数字では表すことの出来ないものです。

では、山の学校での学習の成果とは、どのような尺度でもってとらえられるものなのかといえ、端的に言って「学ぶことが楽しい」という気持ちを感じているかどうかということです。それは、海岸に偶然流れ着いた漂着物を見つけて、驚き、面白がり、もったないかと飽きずに探し回る子どもの姿に喩えられると思います。彼らが何を見つめるのか、いつ見つけて戻ってくるのか、それは予想することが出来ないことですし、私何が何をいつ見つめるかもわかりませんが、山の学校は、必ず期待以上の何かが見つかるはずの、良き海岸であると信じています。

(某)

小学生・かずの部

『かず』 1～3年生 担当 下村麻紀子 / 福西亮馬

「一年の計は元旦にあり」ということで、今年は「ねばる」を目標にしています。「ねばる」というのは「ヒントなしに」ということです。その代わり、「どんなに時間がかかっても良い」ということになっています。

教材は「まちがい探し」を主に使っています。これは、時間がかかると駄目かと言うと、そうではありません。なぜなら、それだけの時間ひたすら一問に向き合ったという事実にも、早くできることと同じくらいの重みがあるからです。

ヒントを教えないとすると、すぐに煮詰まってしまうこともあります。それでもヒントを教えないようにしています。もし教えてしまったら、それは「ねばる」ではなく「ねだる」になってしまうからです。ねだるは「強請る」とも書くようですが、それは結局のところ、本人の達成感から前借りをしてしまうようなことになります。

というわけで、「先生もヒントを教えないから、みんなもヒントを教えなくて下さい」というルールにしています。それが守られるために、私自身も「ヒントを教えたくてうずうずしているけれども、我慢している」という顔をしています。そうした演技は、最初はとてもつらいのですが、しかし途中から「あ！」とか「できた！」という元気で威勢のいい声が出てくると、だんだんと楽しくなってきます。やはり言わなくてよかった、とほっとします。

いつの間にかそうしているうちに、最初にホワイトボードに書いてあった「ねばる」という文字を、ある生徒が、漢字の「粘る」にわざわざ書き直していることがありました。「みんな、これ！これが合言葉やで！」とその生徒が、みんなに向かって言ったことをおぼえています。

そのようなおかげで、私自身も、生徒たちから教えることの自信を与えてもらっています。

(文責 福西亮馬)

『かず』 4～6年生 担当 福西亮馬

このクラスでは、間違い探しのような、感覚的な問題を経て、少しずつ論理的な問題にも挑戦しています。

たとえば、次のような問題を、みなさんはどのようにお考えになるでしょうか。

「ある月のカレンダーがあります。その日付を3×3の正方形の枠で、0～9までの数を最低1つずつ含むように囲ってください。ただし、2けたの数は、19なら1と9とみなします。」

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

解き方を見ていると、ほとんどの生徒は感覚的に、偶然に答を探していました。もちろんそのように解くことも可能なのですが、しかし、ある生徒が次のような発見をしました。

「カレンダーの数は31までしかない。ということは、十の位に1～3がいっぱい出てくる。逆に7はこのカレンダーの中で3つ(7と17と27)しかない。ところが問題は0～9のどの数も最低1つずつ含むようにということだったので、答であるはずの枠は7を必ず含んでいなければならないことになる。それなので、7を含む枠だけを考えれば、答が見つかるはずである」と。

そのように、「最も少ない数を最も先に考える」というアイデアを私に教えてくれました。それが素晴らしかったので、みんなが解き終えた後に前に出てきてもらってホワイトボードで説明してもらいました。

すると他の生徒からも途中で、「あれ？ 7だけじゃなくて、8も3つしかないよ」という声があ

がりました。そこで「じゃあ9は？」とたずねると、誰かがまた「あ、9も、3つしかない」と答えました。「0は？」と聞くと、「0も3つしかない。」「じゃあ、みんな3つずつ？」と言うと、「いや、1~3以外」と返ってきます。「1~3でなかったら、3つずつ？」と確認すると、「多分そう」と返ってくるので、「多分では駄目やなあ。調べてみて！」と言いました。

そうして、4、5、6、7、8、9、0が3つずつしかないことも確認できました。そこで、もとのアイデアを修正して、「4、5、6、7、8、9、0のどれか1つについて、それが入るような枠だけを考えればよい」ということになったのでした。(実はこの解き方で見つかった答は、ただ一つの答であることも分かります)。

このように試行錯誤をしながら、いかに論理的に筋道を立てて、答を追い詰められるか 時間制限を限りなく無視した場合、そうした余裕が生まれてきます。偶然ではなく「いつでもそうだ」と人も納得できるような筋道を、自分なりの方法で見つけた時こそ、その時間、おそらく人は「難しい」「けれども楽しい」と感じるのではないかと思います。それはちょうど、昔々のギリシア人がそうだったように、常日頃はだれもこだわらないところを、こだわることのできる喜びなのかもしれません。

じっくり考えて解けたときのそれは、後々まで自信となり、得意に思い続ける支えになるものです。特に算数(算数よりも数学)の場合は、精神に直接的な喜びがあります。論理性、規則性が見つかると、とにかくねばってみる。すなわち「きっと^{フレックス}抜け道があるはず」という一点にこだわるようにできるとなると、算数を今までとは違ったパズルのように「好き」と感じるようになるだろうと思います。また、ピタゴラスやアルキメデスのころから今も昔も変わらず求められている人というのは、こうした「抜け道」を探せる人ではないかと思います。あるいは、それをあると信じられる人、見つけようとして常にワクワクしている人たちではないでしょうか。

算数、とくに数学を好きになることは、自分でやり方を見つけてそれを愛するところから始まります。自分で見つけたのであれば、たとえどこかに書いてあっても、その時はその生徒が作り出したことに違いありません。そのこと自体が、かえがたい経験なのだと思います。

また、同じものでも「A君が見つけた」と「B君が見つけた」ということは、明らかに違う事実です。その違いにもっと周囲の注目が集まれば、おそらく勉強というものも、横並びを意識するものではなくって、本当の意味で勉強をしたいと思える自由人を育てられるのではないかと思います。

(文責 福西亮馬)

山びこクラブ



対象 小学生(無料)

とき 4月19日(土)
10:00~11:30

『どろじゅんであそぼう!』

- ・来年度から『やまびこクラブ』の時間帯が、土曜日の午前中に変更されます。
- ・幼稚園のときにしたなつかしい『どろじゅん』を、またしに来てください!
- ・雨の日は『ハンカチおとし』をしたりお部屋であそびます。お待ちしております。

中学生・高校生の部

「英語」

中1・英語の基本
中2・英語の基本
中3・英語の基本

担当 山下太郎

本年度私は中学生の英語を担当しました。クラスによっては複数の学年を一度に教えています。一番重視しているのは、個々の生徒の自信を育てることです。比喩的に言えば、「自分の足で英語の山道を登る喜びを実感してもらうこと」です。同じ教科書や問題集を使いながら同時に説明するやり方ではありません。私はどのような生徒であれ、個々の実力（学校の成績ではない）をしっかりと見極め、今その人にとって一番必要な（欠落している）知識が何かを判断し、最適な練習問題を課すことに注意を払います。

素材は中学校の文法事項に関連した英作文の問題が中心です。じつはこのレベルの知識が不足するため、高校生・大学生になっても辞書が上手に使えないケースが多いのです。たとえば、He runs a small restaurant. という例文について、run の意味を「走る」と勘違いしたまま辞書を引かないグループと、この例文のrun はいつもと様子が違うぞ？という勘が働き、辞書にずっと手が伸びるグループとに大別されます。

要は前置詞の in の有無に敏感になることが肝心なわけですが、in のあるなしなどどうでもよい、と基礎をいい加減にしていると、そのつけは「英語の勉強がわからない、英語の勉強は嫌い」というネガティブな気持ちになって跳ね返ります。

一方、辞書を自在に使いこなせる生徒はやればやるほど英語の勉強が楽しくなります（「レストランを run するってどうすることだろう？」と自分で単語を調べる楽しさは、「run = 経営する」と暗記を強いられる苦しさと対照的です）。

このように基礎の力は辞書を用いた応用的な勉強を支えるとともに、英語に対する自信と興味を育てます。

これはスポーツと同じで、基本は頭で理解するだけでなく、体を使って（鉛筆を動かし、声に出して）何度も練習しないと、このあたりのセンス（たとえば in の有無の重要性に気づくセンス）が眠ったままになるということです。

プロ野球の選手ほどキャッチボールの重要性を指摘します。キャッチボールが満足にできない生徒に、ダブルプレーなど高度な技を教えることは意味がないでしょう。

逆に、基本を確実に身につければ、あとは自分でどうにでも英語の勉強を展開することができます。そうなれば、英語はもう大丈夫。日本は英語教育が盛んですが、その内容をよく見てみると、この「展開」の部分だけに焦点を当てている学校、塾、参考書、問題集ばかりです（プロ顔負けのハイレベルなことを教えている）。私は簡単なこと、しかし大事なことを教えています。英語で自信をつけるには、それが一番近道であり、大切であると信じるからです。

（文責 山下太郎）

冬学期の高校英語では、生徒と講師が1対1のために生徒の細かい苦手分野をカバーしていくようにしていました。彼女は学校の定期テストが多いので、多くの問題と自然に出会う機会が多いといえます。そうするとテストの出来によって自然と自分の得意な単元、苦手な単元がわかるようになります。テストは生徒にとって「楽しみ」であることは少ないかもしれませんが、そしてテストが終わると、私自身が高校時代にそうであったように、テストのために抑圧された環境からの開放感に包まれてしまいます。

テストは日々の勉強の力試しをする場です。また、自分の苦手な分野を客観的に判断することのできる場であると思います。生徒の定期テストが多いことは本人にとっては、マイナス的なイメージの大きいことかもしれませんが、しかし、多くの問題を解く経験をするのはプラスのことの方が断然多いといえます。学校の勉強は定期テストのために行うためにするのではなく、自分の目標を達成するためにするのだと考えることができれば自然とテストの後の行動が変わってきます。一人一人様々な目標を持って勉強をしていることと思いますが、その目標を達成していくために必要なことは「テストの前にどれだけ勉強するか」ということより「テストの後何をするか」だと考えます。

出会う問題が多いと本人の経験としてはどんどん増えていくのですが、その出会った問題を自分の中できちんと消化できていないと、二度目以降に解いたときに差が出てきます。そのため生徒には定期テストが終わるたびに、もう一度同じ問題の解きなおしをしてもらっています。答えあわせをして、一度目も二度目も合っていて自分で問題の解説ができれば、その問題は消化できていると言えます。また、一度目は間違っていたとしても二度目は根拠を持って正解を導き出せていたら、問題を理解していると言えます。一度目も二度目も間違っていたらその問題が苦手であると意識し、わかるように辞書や参考書を駆使して「なぜ、この答えになるのか」と考えなければなりません。そして一度目は合っていて二度目は間違っていた場合、その問題が一度目は合っていたことはまぐれであったと自分で気づかなければなりません。「一度目は合っていたからいいんだ」と考えてしまっては、それ以降似たような問題に出会ったとき対応する力をつけるきっかけをなくしてしまうことになってしまいます。そのためわからない問題があったときは、辞書でも参考書でもなんでも使って、なぜこの答えになるのかを探してもらっています。出ている問題が何を問っているかがわかれば、自然と参考書の該当する単元のところを開いています。しかし何を問われているのかがわからない、そんなときは辞書を駆使します。今まで知ったつもりだった単語に知らなかった用法があったり、設問中の単語を一つ知っているだけで解ける問題だったり、問題を解く中で自分が何を覚えておくべきだったのかを見つけるようにしてもらっています。

今教えている彼女は、時間を上手に使うことのできる子です。少し早く山の学校にいったとき、私が前の授業が押してしまって少し遅れたとき、5分の時間でも彼女は単語帳を見ていたり、学校の予習をしていたりとか何かの勉強をしています。時間を上手に使うことは勉強していく上でとても重要なことです。まだ高校一年生であることで、大学受験までは時間があります。そのため今することは、自分の勉強のスタンスを確立することだと思います。単語の覚え方ひとつでも自分のやり方が確立されていれば効率よく覚えることができます。そしてそれは、単語だけでなくほかの勉強にもどんどん応用していくことができます。効率よく勉強ができれば、自分の自由な時間を作れるようになります。自由な時間を持つことで、また勉強に集中できるようになり良い循環が得られると思います。

(文責 下村麻紀子)

『数学』 中1・数の基本 担当 浅野直樹

中学校に進学してからもうすぐ一年になりますが、いかがお過ごしでしょうか。まだ卒業後のことを考えるには時間があり、慣れを通り越してだるさが目立つところかもしれません。

数学に関しましても、多くの学校で3学期に習い、山の学校でもこの冬学期に取り組んでいる図形(幾何)の範囲をもって、代数・解析・幾何という数学の三本柱が出揃うこととなります。これ以降で習うことは基本的に中1で習ったことの発展型です。そのため中1の範囲をしっかりと理解していれば恐れることはありません。しかしもうだいたい何をしているかはつかめたからといって手を抜きがちになるならそれ以上の成長は見込めません。やはり適度な緊張感を持ち続けることが大切でしょう。

ということで、中1の範囲で数学の基礎をしっかりと身につけようと、現在学校で習いつつある図形の範囲を中心として、これまでの範囲の復習にも力を入れています。その際に役立つインターネットサイトを最近見つけました。『FdData 中間期末』(<http://www.fdtex.com/dat/index.html>)というところです。そこにはその名の通り、中間テストや期末テストでよくありそうな問題がたくさんあります。それほど難しい内容には対応おらず、普通の公立中学に照準を合わせているようです。編集と印刷は料金を支払わなければできませんが、閲覧だけなら無料でできます。私も復習プリントを作るときに使っています。特に図形では図を自分で描かなくてもすむので重宝します。それなら「山の学校」に来ないで自分でやったほうが早いと思われるかもしれませんが、それはそれでむしろ歓迎すべきことです。ただ、考え方や解説を示すことに加えて、生徒の実力を見極めて、解けそうで解けないような問題を選び、難しすぎず簡単すぎない(8割くらい正解できる)プリントを作るのが、こちらの腕の見せどころなのです。そうして数学の力を積み上げていくお手伝いができれば幸いです。

(文責 浅野直樹)

『数学』 中3・数の基本 担当 福西亮馬

これから高校生になるうとする、今中学3年生の生徒に、一番持ってほしいもの、それは「自信」です。そしてそれを得るためにも、「基礎」をしてほしいと考えます。というのも、高校生になると、自分任せにしてもらえる一方で、逆にしなければいけないことも注意されなくなってきます。つまり、これからは何でも自分でアクセルを踏んでいかなければならないのですが、誰も覚えがあるように、自信のない道には、自分からすすんで行くことはなかなか困難です。

自信をつけることは、結局は自分しかいません。それだけ聞くと、確かに難しいことです。けれども何をするかという点で、基礎をするということであれば、誰でも可能だと思います。

先のことを言うと、高校1年生の最初に、高次の式の展開を習います。おそらくほとんどの人が、今までの得意不得意に関わらずその複雑さを見て驚き、そこで最初のつまづきを覚えるものと思います。たとえば、 $(x+y)^3 = x^3 + 3x^2y + 3xy^2 + y^3$ という等式がありますが、これは、自分で手を動かして確かめない限り、「この公式は覚えなければならない」と強く思ってしまいがちです。いざ実際 $(x+y)^3$ を展開してみて、 x^2y が3つ、 xy^2 も3つ出てくることを確かめることができれば、その「結果」として先の等式を、公式ではなく自分のものとしておさめられるでしょう。高校生ではこの積み重ねが何より重要になってきます。今までのような「何となく」では通用しなくなってきます。

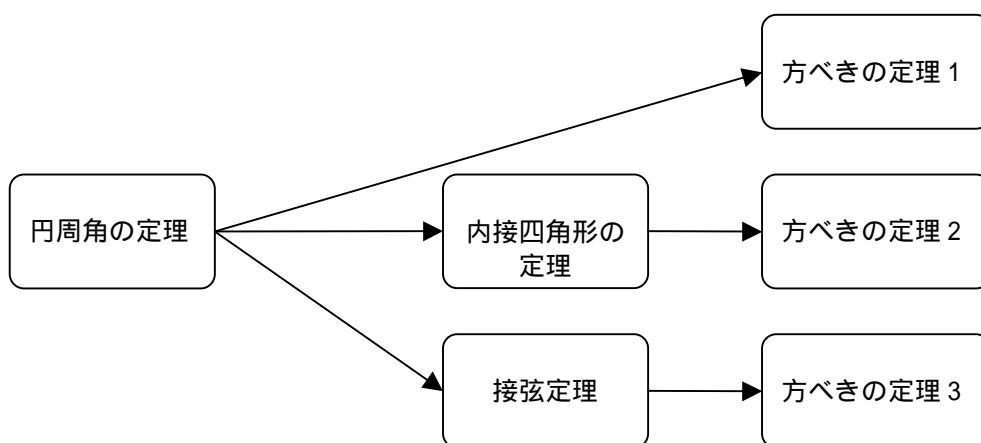
自分で定理を見つけるといって、でなければ書いてある定理を一つ前の定理から導けること、ひいてはそれをどんどんさかのぼって行って、定義から導けるようにすることが、大事になります。その元手には「やってみよう」という自信が必要です。そしてそれは基礎を繰り返すところから得られるのです。

たとえば本当に簡単なドリルを一冊買って来て(お小遣いで買ったのだとさらに意義深いでしょう)それを最後まで解ききってみてください。すると、何だか分からないけれどもやり遂げたような気がきつてくると思います。「これは誰もしていない努力だ」と勝手に思うのもいいのです。ぜひ空いた時間に、この春休みにでも、基本問題をさらえてみてください。それがこれから自信を得ていく一つのステップになるだろうと思います。

(文責 福西亮馬)

こちらのクラスも図形の範囲がメインです。合同や相似を習うと応用の幅が一気に広がります。作ろうと思えばいくらでも難しい問題を作れるので、私もすぐには解き方がわからないことがしばしばあります。前回も書きましたように、最終的には慣れるしかありません。そのあたりが「幾何学に王道なし」と言われる所以でしょう。

そうはいつてもただひたすらに問題を解くだけでは芸がありません。「王道」はありませんが、先人たちが踏み固めてきた「定理」ならあります。ある程度慣れたら軸となるような定理を理解すると見通しが非常にすっきりとします。定理を「理解する」とは、「暗記する」のではありません（もちろん初期の段階ではただ単に定理を用いてその形に慣れることも有益ですが、ここではその先のことを言っています）。理想的には定義や公理から、少なくとも一つ前の定理からその定理を導けるようになることです。最後に今回の範囲に出てきた定理の理解を簡単に示しておきます。



内接四角形の定理	接弦定理	方べきの定理 1	方べきの定理 2	方べきの定理 3
円に内接する四角形の対角の和は 180°	円の接線とその接点を通る弦の作る角は、その角の内部にある弧に対する円周角に等しい。	$PA \times PB = PC \times PD$	$PA \times PB = PC \times PD$	$PA \times PB = PT^2$
$2\alpha + 2\beta = 360^\circ$ $\alpha + \beta = 180^\circ$	$90^\circ - \angle ABC$	$\frac{PA}{PC} = \frac{PB}{PD}$	$\frac{PA}{PC} = \frac{PB}{PD}$	$\frac{PA}{PT} = \frac{PB}{PT}$

(文責 浅野直樹)

「この間、惜しいところまでいったのですが…」とT君がある問題を持って来てくれました。それを解くのに2時間半じっくりと考えたそうです。それは次のような問題でした。

『2008未満の自然数で、2008と同じ個数の約数を持つものはいくらあるか？』

シンプルに見えてとても難しい問題です。そこでどうやって解こうとしたのか、もう一度、T君に紙の上に再現してもらうことにしました。T君の解き方では、途中251までの素数の「個数」を知る必要があり、そこであきらめてしまうのが普通なのですが、自力で最後まで数え上げたというのでした。その個数が実際と合っていたので、非常に自信を得たということです。たとえば197は素数ですが、187は 17×11 で合成数です。そのような一般にある数を素数かどうか判別することは難しいのです。それをどうやって数え上げたか、そのための工夫も教えてくださいました。T君は、11, 13, 17のような大きな数について、先にその倍数表を作っておいたのです。つまりそれらは合成数なので、除外しておいたのです。これは「エラトステネスのふるい」と呼ばれるもの($251 < 17 \times 17$ から、251未満の数を17までの数で割っていけば、素数が残るという方法)と同じ理屈です。T君はそれを知らずに、自分の手で発明したのでした。(まるで無人島のロビンソン・クルーソーのようだと思います！)

T君は、下記の(4)のリストにあるそれを道具にして、時間がかかっても答まで到達できると分かった、確実な道を、あきらめずにたどっていったのでした。

以下に、T君が説明してくれた道筋を書き出します。

問 2008未満の自然数で、2008と同じ個数の約数を持つものはいくらあるか？

- (1) 2008の約数は1, 2, 4, 8, 251, 502, 1004, 2008の8個。
 (2) 約数が8個になるのは、 a^7 , a^3b , abc の3パターン(a, b, c は素数)しかない。そして、それぞれについて、 a, b, c の値の上限までパターンを考えればよい。
 (3) 2008は $2^3 \times 251$ なので、251未満の素数について調べる必要がある。(以下に列記)
 (4) 2, 3, 5, 7, 11, 13, 17, 19, 23, 29, 31, 37, 41, 43, 47, 53, 59, 61, 67, 71, 73, 79, 83, 89, 97, 101, 103, 107, 109, 113, 127, 131, 137, 139, 149, 151, 157, 163, 167, 173, 179, 181, 191, 193, 197, 199, 211, 223, 227, 229, 233, 239, 241の、計53個。(このリストがT君の道具でした)
 (5) a^7 $2^7 = 128 < 2008$ の1パターン。
 (6) a^3b $2^3 \times b$, $3^3 \times b$, $5^3 \times b$, $7^3 \times b < 2008$ となる **b は(4)のリストより80パターン。**
 (7) abc $2 \times (3, 5, 7, 11, 13, 17, 19, 23, 29) \times c < 2008$,
 $3 \times (5, 7, 11, 13, 19, 23) \times c < 2008$,
 $5 \times (7, 11, 13, 17) \times c < 2008$,
 $7 \times (11, 13) \times c < 2008$ となる **c は(4)のリストより286パターン。**
 (8) 答、合計367個。

これは実に惜しいところまで行っていたのでした。T君は自分からその合わない数についても説明してくれました。「(7)のところで2008未満の自然数を作るためには、 $2008 = 2^3 \times 251$ の形から、うっかり251以上の素因数は使わないものだと思い込んでいました。実は $2 \times 3 \times 331 < 2008$ のように251以上の素数を使う場合もあって、それも考える必要があったのです」と。正解はあとわずかに18個だけ多い385個でした。けれども、その悔しそうな本人の様子に私はむしろ感心しました。彼は、一つの問題についてマラソンと同じような時間を、ずっと頭の中で走り続けていたのだからです。

(文責 福西亮馬)

高校生・一般の部

『いま、新しい古典への扉が開かれる』 ～山の学校、新講座開講！～

山の学校では、4月から新しく古典の講座を開講いたします。古文・漢文に興味をもち始めた高校生から、もう一度原書に親してみたい大学生・一般の方まで、広く募集します。

基本的に、学校で学ぶような文法をきっちり踏まえたうえで、本文の読み解きに取り組みます。他の「山の学校」の講座と同じく、単なる知識に留まらない、生き方を学ぶ場となります。みなさまのご参加をお待ちしております。

《講座の概要》

【古文入門】(高校生・一般)

初めて古文を学ぶ方、文法を復習したい方を対象に、平易な本文を読むと同時に、文語文法について学びます。生きた知識として文法を使えることを目標とします。テキストはコピーにて配布の予定です。辞書および文法書は、お手持ちのもので結構です。

【古文講読】(高校生・一般)

文語文法の既習者を対象に、古文テキストの精読を行います。ポイントとなる文法解説を踏まえた正確な読み取りで土台を固めつつ、テキストの持つ思想について深く考えていきます。今期は『徒然草』をテキストとする予定です。文庫等、お手持ちのもので結構です。辞書・文法書も併用致しますので、ご準備をお願いします。

【漢文】(高校生・一般)

漢文テキストの講読を行います。受講者のニーズに併せ、文法・句法を踏まえた正確な読み取りを目指します。テキストはコピーで配布の予定です。漢和辞典・文法書をお持ちの方は、ご準備いただくと幸いです。当初はお持ちでなくても結構です。

『ウェブプログラミング入門』

現在、多くの方がインターネットを利用しています。また、その利用形態は様々で、専ら情報収集に活用する場合もあれば、自ら情報を発信する場合があります。インターネットが一般的に流布しているとはいえ、情報発信に利用をしている人は全体のごく一部でしかありません。しかし、受信にとどまらず発信することには、計り知れないメリットがあり、現代の情報社会ではますます重要な地位を占めていくことになることは間違いありません。このような、情報発信という発想と技能を身に付けておくことで、今後の情報環境の変化にも柔軟に対応することができる力を養うことができます。

本授業では、このようなインターネットにおける情報発信にテーマを絞って、その具体的な方法の紹介と実習を行う予定です。授業内容は、受講生のコンピュータ、インターネット習熟度によって柔軟に対応しますが、概ね XHTML と CGI (Perl) を扱う予定です。XHTML は、インターネット上の情報発信の基礎となる技術で、普段目にするウェブページを構築する言語です。CGI は、ウェブ上のデータを柔軟に活用する手法で、多くの複雑なページで使われています。この他にも、必要に応じて関連分野の諸技術を取り扱うことがあります。

『ラテン語入門』

担当 前川 ^{ゆたか}裕

今学期は、お一人が受講されています。通常は一回あたり4課ずつ進むのですが、今回は意欲的な方で、一回に5課ずつ進んでいます。速く進むと毎週の課題をこなすのは大変ですが、そのぶん身に付くのも速くなると思います。その意味で、語学にはスピードも大事ですね。

「初級文法」は文法の講座なので、どうしても理屈が多くなってしまいます。文法の学び自体は、多少分からないところがあってもさっさと終えてしまい、実際の本文を読むことが有益です。それから文法を復習しつつ読解していても遅くはありません。

あなたも、ラテン語を始めて見ませんか。2000年前の文章は、あまりにも現代的な姿を見ることがあります。翻訳では伝えきれない、ラテン語原文を味わうことは一生の楽しみとなります。「山の学校」ではこれまで、大学生から定年を超えた方まで、たくさんの方にラテン語の魅力を伝えてきました。新しい学期には、新しい仲間を募集しています。ご不明な点やご心配な点は、どうぞ遠慮なくお問い合わせください。

(文責 前川 裕)

『ラテン語初級講読』

担当 前川 ^{ゆたか}裕

この学期ではセネカの『ルキリウスへの手紙』を読んでいます。一つ前の学期に初級文法を終えたばかりの方が多く、文法事項の確認を丁寧に行いながら、ラテン語原文を読んでいます。近年に日本語訳も揃いましたので、邦訳も適宜参照しながら、訳とは違うラテン語原文のニュアンスを感じ取りながら読んでいます。

登録は4名と、山の学校のラテン語クラスとしては過去最大の人数となりました。残念ながらご都合で途中から抜けられた方がいらっしゃいますが、残り3名で毎週和気藹々と学びを続けています。

次学期も引き続きセネカの書簡を読む予定です。初級文法を既に終えた方なら、どなたでもご参加できます。

(文責 前川 裕)

『ラテン語中級講読』 A・B

担当 山下太郎

「中級講読」のクラスでは、キケローの『友情について』とウェルギリウスの『農耕詩』を読んでいます。『友情について』は岩波文庫にも入っているポピュラーな作品で、翻訳もすばらしいので一読をお奨めします。一方、『農耕詩』は京都大学学術出版会から翻訳が出ています。日本では知名度が低いようですが、ヨーロッパでは「最高の詩人による最高の作品」(ドライデン)と評価されています。今これらの作品をじっくり読み直す機会を得て感じることは、どちらもある程度年齢を重ねてこそ味わえる作品だということです。ラテン語を学ぶ上で、文法や語彙の知識は不可欠ですが、これらの知識はラテン語を「読む」ための道具に過ぎません。「大人」の学習者には「年齢」(経験)という武器があり、ウェルギリウスやキケローの読解にこれを生かさない手はありません。今講読のクラスに参加されている方は、みな「山の学校」で初級文法を終えた方ばかりですが、読解を通じて文法と語彙の力を伸ばす一方、それぞれの立場で培ってこられた人生観を作家のそれと照らし合わせるにより、深く原文を読み解く楽しさを経験していただいています。

(文責 山下太郎)

～ラテン語こぼれ話～

『卒業と始まり』

文 / 山下 太郎

「卒業」といえば、どのような英単語を思い浮かべるだろうか。和英辞典を引くと、commencement という言葉が見つかり、ちょっとびっくりする。commencement は、もともと「始まり」を意味する言葉だからである。一方、「卒業」の「卒」を漢和辞典で引くと「終える」という意味が見つかるが、commencement には「新しい旅立ち」というニュアンスが認められる。視点の相違が興味深い。

「卒業」といえば graduation を思いつく人の方が多いだろう。語源はラテン語の gradus (グラドゥス) で、「階段、段階」を意味する。つまり、階段を一歩ずつ登るイメージが graduation という英語にはこもっている。大学の四年間の生活を例に取れば、一回生のときは、建物の一階、二回生は二階にいる。そして「卒業」する学年になると四階にいるということだろうか。では、五階はどこに？

日本語の「卒業」という言葉から発想すれば、大学院に進学する人は別館五階への階段を登る、就職する人は「出口」(exit) から「さようなら」と手を振って去る、といったイメージがつかまとう。しかし、英語の場合、graduation にせよ commencement にせよ、四年間学び終わった学生全員に対し、もう一段上方に足を踏み出すよう促す言葉となっている。

つまり、イメージの上で語るならば、日本の大学は閉ざされた四階建ての建物になっているのに対し、グラデュエーション (graduation) という英単語の喚起する心象風景は、むしろ山登りのイメージである。世界で初めて大学の基礎を創ったプラトンに言わせれば、人間として善く生きる道を登っていくこと、と答えたかもしれない。山頂には「善のアイデア」(究極の真理) が位置している、とも。

たしかに、人として「真・善・美」を学び知ることのできる場所は大学に限定されるわけではない。逆に、大学で行われる学問研究も、個々人の真理の認識を深めるのに役立たないのであれば、どれほど優れた評価を他人から受けようとも、その人は「学びの山」を登っているとは言われない。

一方、山道を登っていると、ちょっと見晴らしのよい場所で立ち止まり、眼下に広がる町並みを眺めるとき、あるいは遙かにそびえ立つアルプスの山並みを地上では見ることでできない角度から眺めるとき、清々(すがすが)しい気持ちになるものである。

私のイメージする卒業式とは、そんな「山登りにおける小休止」といった趣がある。ちょっと気づくと、今来た道と変わらない「階段 (gradus)」が、相変わらず上方に果てしなく続いている。私たちは、人として学び続ける限り、一生このような形で階段を登っていくのだろうか。山頂に近づくと、どんな景色が見えるのだろうか。

(文責 / 山下太郎)

第12回

ラテン語のゆうべ

3月3日(月) 午後8時10分～9時30分

講師 某

場所 山の学校(北白川幼稚園内)

対象 ラテン語に関心のある方 (参加無料)

読書案内 私の一冊

No.4

『モモ』

ミヒヤエル・エンデ作 / 大島かおり訳、岩波書店

時間どろぼうとぬすまれた時間を人間に
とりかえしてくれた女の子のふしぎな物語

街外れの、古びた円形劇場にある日、モモという小さな女の子が住み着きました。モモは不思議な才能を持っていました。それは「聞くこと」でした。彼女に話を聞いてもらおうと、どんな悩みごとでも吹き飛ばしてしまい、モモと一緒にいたいと思うようになるのです。

そのモモの街にある日、灰色の紳士たちがやってきます。彼らは、命（生活）の中の無意味な時間を計算し、『時間貯蓄銀行』に貯けることをすすめます。街の人たちは「時間が貯金できる」という話を聞いて、次々と預けるようになっていきます。五分急いで仕事をすませれば、五分貯金できる、十分恋人と会わなければ、十分貯金できる、というように。

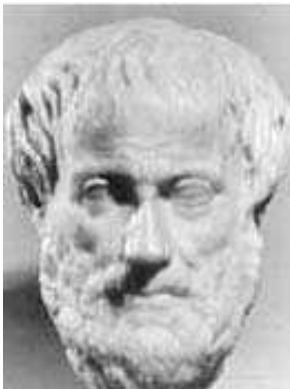
しかし、銀行に時間が貯まれば貯まるほどほど、人々の心はどんどんせわしくなく、怒りっぽくなっていきます。ゆとりがなくなるのですから無理もありません。

大人をまねて子どもたちまでもが、忙しくなります。そしてモモといっしょに遊んでいた子どもたちも、彼女のもとから去って行ってしまいます。彼女と仲良くしていた大人たちも、とうとうモモといる時間を『時間貯蓄銀行』に貯けてしまうのでした。

モモはひとりぼっちになってしまいました。そこへある日、灰色の紳士が一人やってきます。モモの身に危険が迫ります。モモは、みんなの時間が、実は盗まれていることに、気がついてしまうのです。灰色の紳士たちは「重要危険人物」のモモをつかまえようと、必死になってあとを追いかけて来ます。

さて、いかなる味方が、ひとりぼっちのモモのところへ助けに来てくれるのでしょうか。灰色の紳士たちの手から、モモはうまく逃れられるのでしょうか。そして、盗まれた時間をみんなにとりかえそうと、「時間の国」でどんな体験をして帰って来るのでしょうか？ それは、『モモ』の本を読んでからのお楽しみです。

(文・福西 亮馬)



日本語の読み書き

中学生 火曜日 pm 6 : 40 ~ 8 : 00
高校生 火曜日 pm 8 : 10 ~ 9 : 30

毎授業、テキストを少しずつ読破しながら、それに基づいた作文、小論文、討論を行っています。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今も、そして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう！

～ 講師のエッセイ ～

『文学部で学んだこと 100年先の世界のために』 エッセイ / 山下太郎

京都大学文学部100周年記念誌所収

私は英文科四回生の秋、思い切って西洋古典文学に専攻を変える決意をした。岡道男先生（当時の主任教授）のおられた研究室は、今はなき煉瓦造りの旧館二階にあった。専攻変更のお願いをするため、おそろおそろ先生の部屋の扉をノックすると、万巻の書物がそびえ立つように見えた。先生は私の志願理由を頷きながらお聞きになり、ご自身も独文出身であると打ち明けられた。私がラテン語もギリシア語も4時間コースを履修していないことを察知されると、「語学は慣れです」と口にされ、先生の実践されたラテン語、ギリシア語習得法 先生はこれらの言語を学部の一、二回生の頃に習得された を次のように語って下さった。まず、春休みの全期間、その言語の習得のことだけを考えて集中的に独学する。その際、文字通り寝食を忘れて取り組むこと。次に、新学期から開講される西洋古典の演習に出席し、辞書を引いて原文を読む訓練を続けること。

私が目をぱちくりさせてお話を伺っていると、先生は書庫から両手でないと持てないような大型の辞書や注釈書を机の上に運んでこられ、ギリシア語、ラテン語それぞれの単語の調べ方、注釈書の使い方を教えて下さった。時間にしてゆうに一時間を超えていただろう。そのころ先生は後期の授業でケケローの『国家について』を読んでおられたが、該当箇所のコピーを渡され、次回の授業から参加するようと言葉を添えられた。勇んで参加した授業のレベルは私の想像を絶するものであった。参加者は錚々たる院生ばかりが五、六人、学年順にオックスフォードのテキストを飛ぶように訳していかれる。ちらっと横目で覗いても、テキストに何も書き込みは見あたらない。私はといえば、原文のコピーを拡大してノートに貼り付け、余白に辞書で調べた結果をありったけ書き込むものの、辞書を引くだけで精一杯のありさまであった。先生はときおり「ここはこう訳してもよいですね」と簡単にコメントされるのみで、あっという間に数ページの訳のチェックが終了する。驚いたのはその先で、先生はもう一度最初から原文をご自身の言葉で訳していかれたのである。重要な箇所については「ここは(学問上)問題の箇所です、後で説明します」とコメントされ、そのままどんどん先を訳していかれた。まるで日本語の訳を朗読されているかのように。こうして二度にわたる原文の訳読が終了すると、今度は細かな字でびっしりと書き込まれた研究ノートのコピーが配布された。そこには、解釈上の争点が文献案内とともに整理されていた。先生はこのノートに即して従来の学説を整理され、あわせてご自身の見解を開陳していかれるのだった。

その後年月が流れ、大学院の修士課程、博士課程と進学する中、私の理想は岡先生のように流麗に原文を訳し、先生の流儀で研究ノートを作り、論文を発表することであった。すなわち、テキストの精読と研究史の精査からにじみ出てくる自分のオリジナルな解釈の萌芽を大切に育て、論文という花を咲かせること。しゃにむに勉強し、語学の問

題以上に研究の壁に何度もぶつかったとき、私は先生の論文をどれだけ繰り返し読み返したことだろう。先生が研究対象とされた原文を自分の手で徹底的に読み砕き、その後先生の論文を何度も読み返すこと。この繰り返しによって、私は論文の書き方に関し、先生の「攻め方、守り方」が目をつぶっても浮かぶようになった（気がした）。それは、有名選手のフォームをまねて素振り続ける野球少年と何ら変わらぬ気持ちであった。苦勞の末修士論文を提出し、先生から「100年先の世界のために研究するように」と言われたとき、私は「普遍」という言葉を何度も心の中でつぶやきながら、熱いものがこみあげた。

その後さらに歳月は流れ、私は文学部でラテン語を9年間教える榮譽に浴したが、この間父の病状の悪化を受け、家業であった幼稚園を継ぐために本務校（京都工芸繊維大学）の職を一昨年辞した。愛着のあった文学部の授業（ラテン語4時間コース）のみ昨年度末まで続けさせていただいたが、この最後の年の授業では、前期に文法書を終え、後期にキケローの「スキピオの夢」を読むことにした。私にとって思い出深い『国家について』を締めくくる有名なエピローグである。熱心な学生たちとテキストを精読する時間は、文字通り至福のひとつであった。だが最終回の授業で *hanc tu exerce optimis in rebus!*（これを 汝の魂の力を 最善の仕事において発揮せよ!）という表現に出会ったとき、感無量の思いがした。ここで言われる「最善の仕事」とは、文脈に即して読むと *res publica*（国家）を守り発展させることであるが、このラテン語は広い意味で「公の仕事・事柄・問題」など多様な意味を内包する。引用したキケローのラテン語を吟味するうち「魂を込めて世のため人のために尽くせ」と読める気がしたのである。学問の世界から飛び出し、新しい仕事の継承と発展に心を砕いていた私にとって、この言葉は大きな励ましのように感じられた。一方で私は、文学部で学んだ *philosophia*（知を愛する心）を子どもたちと分かち合いたいという願いを込めて、幼稚園長就任と同時に、小学生以上の子どもたちを対象とした学びの場（山の学校）を創設していた。そこでは国語の教科書代わりにプラトーンやアリストテレスの作品を読み、講師と議論を交わす。キケローやセネカのラテン語を読み解くクラスもある。大人も子どもも無心になって学ぶ場がここにはある。

今の活動の原点には、岡先生によって *res publica*（公の仕事）としての研究の道を示していただいたことへの感謝がある。文学の研究とは、無数の人々に読まれてきた *res publica*（公共財産）としてのテキストを守り、次世代に伝える仕事のことであった。他の学部の研究が、現実に役立つものを成果として期待されることが多いのに対し、文学部の研究はいつも「普遍」や「理想」をテーマとし自由に議論することが許される点で「学問」の王道を行くものである。だが、この道を生かすも殺すも結局は「人」次第なのだと思う。論文の数を競ったり競わされたりする態度は、「私的な問題」（*res privata*）に執着することを意味するのである。だが、学問の意義はそのようなところにあるのではない。同様のことが教育に関しても言えるだろう。人を育てる道とは、畢竟「私」を超えた「公」の存在としての「人」を育てることである。再びキケローの言葉に耳を傾けるなら、*res publica* と呼びうるものは時空を超え、永遠に存在し続ける。また、人間にはそれぞれの立場でこれを守り育てる道が開かれている。今私は論文を書く者ではないが、「100年先の世界のために」という志は、新しい仕事の中で変わらぬ意味を持ち続けているのである。

（・・・「京都大学文学部百周年記念誌」（2005年）より）

山の学校 6 周年目を迎えるにあたって

おかげさまで、山の学校はこの4月で開設6年目を迎えます。山の学校はどのような理念で設立されたものなのか、またこれからの未来に向かって、私たちは何を目標として教育活動を展開していくのか、代表からのメッセージをお届けいたします。

新たなる挑戦

山の学校代表 山下太郎

今の教育はどこがおかしいのではなく、もはや狂っていると言った方がよいのではないか(私たちが目を覚ますという意味で)。学ぶ者(本来教える者も学ぶ者のはずだが)は、真の学びの喜びを味わうことなく、試験のため、受験のためにせわしく学びを強制されているだけではないだろうか。私は勿論自分の言葉が言い過ぎであることを心から願う者である。むしろ「試験のために勉強する」というフレーズをここで取り上げ、この言葉のもつ意味を一度徹底して反省する時期がきていることを強く主張したいと思うばかりだ。

教師は一度胸に問うてほしい、「この子たちは試験がなくても私の話を聞いてくれるだろうか」と。学ぶ者は知識だけでなく、先生の「生の言葉」を聞きたいと願っているのではないだろうか。一方、試験をなくしたら、どうやって評価するのだ? という声が聞こえてきそうだが、この疑問をもつ者にこそ、前ページの私のエッセイを熟読してほしい。学ぶ者は一体何を真の動機として勉強に励むのか、この一文からくみ取ってほしい。このエッセイは「私の」物語ではない。一昔前の大学ではごく日常的なエピソードにすぎないと私は信じるからである。そしてジャンルを問わず、学校を問わず、大学で真摯に学ぶ者の心には、今もこの熱い「学びの魂」が宿っているはずだ。

つまりこの「学びの魂」に火をつけるのは人間であって試験ではないと私は主張しているわけである。かりに大学での学びが本来そのようなものであるならば 実はギリシアにさかのぼる教育の伝統に照らせばそうなのであるが、そして一方では学校教育が目標として大学進学を視野に入れるのであるならば、この「学びの魂」の準備こそ最重要課題のはずであるが、実態はどうであろうか。

私は決して「学びの魂」か「試験」かといった単純な二者択一の議論をしたいわけではない。人間は裸でも人間だが服を着て生活をしないといけない。しかし服や身なりがその人の本質を表すものではない。私はうわべではなく、人間の魂の輝きを映す目そのものを見つめよと主張しているのである。教育において最も大切なものは、数値に変換可能な統計データでは断じてない。

しかし現実はどうだろう。私たちの「常識」に照らしたとき、「試験のない学校は考えられない」と多くの人が口にするのではないだろうか。私の考えは逆である。「学びの魂」を欠いた学校は考えられないばかりか、さらにつけ加えて言えば、「個を見つめるまなざし」を欠いた学校は考えられないのである。

以上述べてきたことは、「幼児教育」という生命の輝きそのものの幼児たちと日々接する経験がお前にそう言わせるのだ、と人は言うかもしれない。だが、それは「半分本当で、半分ちがう」と私は言いたい。なぜなら、小学校以上の教育においても「個を見つめるまなざし」が「学びの魂」を育てる本質であることを私は確信するからである。

というのも、ここに「山の学校」の5年の実績というものがあるからだ。それは、冒頭来提示してきた「試験のない学校において学びの魂を育てることは可能か？」という問いへの何より明白な答えである。どうか、今回の（願わくばバックナンバーも含めた全ての）「山びこ通信」をすみずみまでご一読いただきたい。どの講師のどのクラスも、私の目には「学びの魂」の輝きが満ちあふれて見えるのである。

今、「山の学校」は子どもたちだけでなく、大学生や社会人も集う「学びの場」となっている。本物の学びの前に、立場や年齢等の違いは一切ない。一日の仕事を終えた社会人が、ラテン語の辞書と格闘しながらキケローに挑戦する姿は、「ことば」のクラスで大きい広辞苑を一生懸命引きながらテキストを読む小学生、さらには幼稚園で虫採りに夢中になる幼児と全く同じように光り輝いて私の目には映る。

この万人が平等に授かった「聖なる好奇心の輝き」を教育は何より大切な宝として尊重し、育てていかねばならない！「山の学校」はそう強く信じ、5年前に船出した。当初は、この信じる気持ちだけが先走っていたといえるかもしれない。しかし、何かにつき動かされるようにひたすら私たちは船をこいできた。たかが5年、されど5年。この5年間の歩みは決して小さなものではなかったはずだ。この5年間をふり返った私の率直な思いをつづると、それは「感謝」の二文字に集約される。一つは、何より私たちの活動を信頼し、応援してきて下さった数多くの会員ならびにご家族の皆様への言い尽くせぬ感謝の念。もう一つは、「山の学校」の理念に共鳴し、我こそは！と飛び込んで来てくれた、そして一緒に汗を流し船をこいできた若き先生たちへの感謝の気持ち。

さて、今私がこうして過去をふり返るには、それなりの理由がある。私はこれまで20年以上にわたり、様々な場所で様々な形で「教師」の仕事を続けてきたわけだが、現場で「教える」仕事は今学期限りとし、四月からはオブザーバーの立場として「山の学校」の活動を後方支援していきたい（ちょうど幼稚園における園長の立場のように）。この決意の背景には、若い先生たちの活躍がある。それぞれのクラスで見事に「山の学校」の理念を生かした「学びの場」を実現していることを思い、私は安んじて彼らの夢と情熱に希望を託すことができる。私のポジションを若い世代に委ねることにより、今後益々多くの情熱溢れる先生たちが、「山の学校」でそれぞれの個性を生かした「学びの場」を創造してくれることだろう。私はこの流れを大事にしたい。

事実、私が手がけてきた古典教育（ラテン語）については、この四月より京大西洋古典教室より若き俊英がラテン語のみならずギリシア語も教えてくれることになった。同じくこの四月からは古文及び漢文のクラスも開設される運びである。私はこの新クラスの方向づけを熱く語る先生の言葉から、かつて大学時代に経験した「読書会」（学生が自主的にテキストを選び、切磋琢磨しながら読み合わせを重ねる）を連想した次第である。まさに「山の学校」ならではのクラスが今産声を上げようとしている。また一方では、この四月から「山の学校」の卒業生が、はじめて先生となって子どもたちを指導するといううれしい展開もある。

こうして「山の学校」はこれまでの5年間の挑戦を土台とし、四月からよりパワーアップした形で「新たなる挑戦」を続けていくことになる。私は、今後今まで以上に自らの心の目を開き、こどもたち一人一人の魂の輝きを見つめ続け、真摯に学ぶ者たちの「学びの魂」を励ますとともに、夢を共にする若き先生たちを力一杯応援していきたい。皆様、今までありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひいたします！

山の学校代表
山下太郎